

「遠いおとぎの国」へのメッセージ

トーマス・マンから「日本への新年の挨拶」、1947—1954

ヴォルフガング・シュヴェントカー

(訳者 池田昌子)

長年、私は歴史学を生業にしていますが、文学に惹き付けられてやみません。その理由は、私たちが歴史の資料で知っている人間のさまざまな行動が、文学の中で虚構の私たちで、優れた文体で表現されているからでしょう。

トーマス・マンの作品が、ドイツ人にとって大きな意義があるのは不思議ではありません。彼の数々の作品は、ドイツ語圏で現在まで文学の最高傑作とされ、長編小説『ブッデンブローク家の人々』が特別な存在なのは、1929年に、この出世作でノーベル文学賞を受賞したからという理由だけではありません。

トーマス・マンの作品への私の敬意は、1973年にデュッセルドルフ大学一年の冬学期、『ファウストゥス博士』のゼミを受講したことがきっかけでもありました。それまでこの長編小説を読んだことがありませんでしたが、当時すでに評判になっていた「トーマス・マン・コレクション」の資料を使ってゼミのレポートを書くことが必須事項とシラバスに記載してあったのが直接の理由です。ドイツ文学者で書店経営者のハンス・オットー・マイヤー（1903—1983）が、デュッセルドルフの目抜き通りケーニヒスアレーのシュロプスドルフ書店を所有していました。その建物の広い一室に膨大なコレクションが収められ、ここは私にとってとても魅力的でした。

1920年代からハンス・オットー・マイヤーはトーマス・マンの作品を収集していました。捕虜生活から帰還した1948年にマイヤーが書店を再開し、長い年月を経て直筆サインのある初版本、翻訳本、自費出版本や報道記事などをコレクションに付け加えていきました。トーマス・マン自身がデュッセルドルフのこの書店を訪れた時、「ハンス・オットー・マイヤーは私が所有するよりも私の本を持っている」と言ったそうです。今日このコレクションは、デュッセルドルフ大学の所蔵ですが、そこには数千通におよぶ書簡、マンに関する切り抜き、写真やその他関連のある品々が含まれています。1973年の冬学期に、『ファウストゥス博士』の小説の中の語り手ゼレヌス・ツァイトブルームについてのゼミ・レポートを書かなければならなかった一人の大学生にとって、マイヤーのトーマス・マン・コレクションの入室は初めて学問にふれるための素晴らしい場所でした。

私は大学卒業後もトーマス・マンの小説や短編をよく好んで読んでいました。それからずいぶん後の2002年に大阪へ移住してからのこと、実を言うと、私が在籍する研

究室の資料室で日本語訳版『トーマス・マン日記』がたまに目にとまったのが、再びマン作品に熱中する始まりでした。マン作品の中で、この『日記』には他の作品にない一面があり私の関心をそそりました。

その後もドイツに行くたびに、古本屋で原書の『トーマス・マン日記』を探し、購入するようになってきました。たいていの場合は在庫があつたため、まだ揃っていない日記の何冊かを手に入れるのはそれほど難しいことではありませんでした。それは、この日記がドイツの一般読者にはほとんど興味がなく、専門家だけが手に入れていたことをうかがわせました。所持する『トーマス・マン日記』のほとんどが、もう誰も読まないので公立図書館から古本屋に払い下げられた不要図書ばかりです。

『トーマス・マン日記』は彼の作品の中で、独自の存在です。この著名な作家は生きていたはずと日記をつけていました。しかし、日記の多くがもう存在しません。他人の手にわたるのを怖れて、本人が焼いてしまったのです。1896年、ミュンヘンで青年時代の日記を処分し、

青年期から1932年初期までと1918年から1921年の分を除いて、アメリカ亡命時代の1945年5月に焼却してしまいました。それ以外の1933年から亡くなる1955年までのすべての手記は、彼の死後20年経てから公刊するようにとの指示がっていました。

現在、全10巻からなる編者による詳細な註のついた『トーマス・マン日記』が刊行されています。トーマス・マンの伝記と20世紀史に関する重要な価値のある資料です。トーマス・マン研究は、これまでこの日記を十分に研究しきれていませんが、マン研究者のヘルマン・クルツケがこの作家の業績と人物についての著書で指摘しているように「書評や人物評が大部分」です。それゆえ、毎日の書き込みが、トーマス・マンの作品の理解にあまり役に立ちません。日々のメモの中には、時おり「章の続きを書く」というワンフレーズがしばしば見られるだけです。さらに、日々の記録にある、彼の健康状態やバイセクシュアル傾向について、来る者を拒まず受け入れた客人について、手紙のやりとりや、政治的精神的な時代の動きなど数多くの手掛かりが目を引きます。

『トーマス・マン日記』を読んでいた時、ナチス時代から冷戦時代の政治や文化の動向に対するマンの評価に強く惹き付けられました。この日記をドイツではなく日本で読んだために、外国から新しい視線で彼の文章を研究するきっかけになりました。そしてトーマス・マンが亡命先のカリフォルニアで過ごしていた時期となる、戦争末期の記述で特徴的なのは、日本についての発言が多くなっていたことでした。当然のことながら戦争の情勢を考えて、いわばアメリカの視点から戦争を洞察していました。日記では1941年の太平洋戦争勃発まで全くとっていいほど日本について触れられていませんでした。唯一出てくるのは、1936年2月の軍隊の叛乱（いわゆる2・26事件）について、翌年の1939年にマン研究を出版したドイツ文学者の麻生種衛からの書簡についてでした。とはいえ、亡命前からすでに日本との接点があり、例えば、自作が翻訳されたことについても知っていました。1932年に日本の年鑑雑誌『ゲート研究』のため、「ゲート百年祭に際して日本青年に興ふ」を執筆しました。この論文の冒頭で「世界文学」の概念について述べ、つぎに日本の読者が特に関心を抱くであろう、自然科学技術の発展に関してのゲート

の展望を取り上げていました。その他、マンの長女エーリカと長男のクラウスが世界旅行で、1928年に日本を訪れており、その報告を受けています。また、彼の親戚も日本と関係がありました。妻のカティアの双子の兄弟、音楽家で指揮者のクラウス・プリングスハイムは、1931年に東京音楽学校（現東京藝術大学）の作曲教師として職を得ており、一度日本を離れますが1941年から1946年に再来日、再び1951年から武蔵野音楽大学で教授に就任していました。それから、1945―46年にマン一家の使用人として日本人夫婦が働いていたという事実にも触れておかなければなりません。これらの事実を見ると、トーマス・マンと日本との関係は特に深いとまでは言えないにしても、多岐にわたっていたことがわかります。

軍国主義と帝国主義は、1936年のナチス・ドイツと日本との間の防共協定のような緊迫した事態をもたらし、1941年に、ついにアメリカ合衆国と日本の戦争へと発展しました。このことが原因で、アメリカに亡命していたトーマス・マンと日本の研究者との繋がりには完全に断たれることになりました。唯一、義弟クラウス・プリングスハ

イムを通じて時おり日本と日本の政治について、またナチス支配下の1930年代のドイツでは、マン作品が出版禁止となっていた間、日本では竹山道雄らの翻訳によって出版されていたことも耳にしていました。ヒトラーが死んで、欧州で戦争が終わってからは、アメリカの一般市民の注意がアジアでまだ続いていた戦争に向けられました。当時カリフォルニア在住だったため、トーマス・マンはこの動向の証人でした。1945年7月以降の『トーマス・マン日記』には、日本についての記録が目立ちます。同年7月22日の終戦条件の覚書に始まり、原爆投下の記録と続いています。

原爆投下をマンは途轍もない悲惨な歴史的出来事であると認識していましたが、この悲劇と自意識の強いメモがいとも通りに記録してあるのが特徴的です。以下が1945年8月6日の日記です。「第27章を書き終える。白い靴と色ワイシャツを買うためウエストウッドへ。―分裂させられた原子（ウラン）の力が作用する爆弾がはじめて、日本への攻撃に使われる」（『トーマス・マン日記 1944―1946』紀伊國屋書店 556頁）。1945年9月ま

で日本の政治状況を書き留めていますが、しばらく中断したのち、まれに日本についての記録を目にします。1952年のサンフランシスコ平和条約や1954年にビキニ環礁で水爆実験が実施され、多くの日本の漁師たちが被爆し、死に至ったと記録がありました。ここでマンは、「アメリカやその意のままの国々では残酷な無関心」(『トーマス・マン日記 1953—1955』紀伊國屋書店 393頁)を嘆いています。

1945年の日本の戦争終結と無条件降伏のあとでは、政治的出来事と並んで、日記には様々なテーマが書き込まれています。「日本」に関連した事柄としては、家族に関する記述があります。例えば、1951年に義弟クラウス・プリングスハイムが再訪日したことや、1953年に末の息子のミヒアエルが日本を旅したことを書き留めています。より重要なのが、マンと書状を交換したり、彼を訪ねたりする日本の研究者やジャーナリストとの繋がりでした。著作の翻訳のことや作品中のある特定の側面に関する専門的な問いが主な話題でしたが、時には平田次三郎との往復書簡の中で、1945年以降のドイツと日本の戦争責

任に関する政治的な質問に答えることもありました。(浜川翔枝『Thomas Manns Briefe an Japaner』Tokyo: Dogakusya (同学社) 1960, p.2-20) これに関して、トーマス・マンはドイツの戦後の責任問題について強い非難を唱えました。また、1948年12月28日の平田に宛てた長い手紙で、ナチス支配下のドイツの特質は、日本とはまったく違うもので、下劣きわまりないものであり、群衆の本能に重点をおいたものであったことを明確にしていました。

1947年から1953年の間に、この著名な作家に「新年の挨拶」を依頼する多くの問い合わせが日本の新聞社からありました。マンは日本の新聞社からの要望に全部で四度応じました。現在まで、こうしたテキストについてまだ十分に論じられていませんが、1945年以降の世界における日独の立場をマンがどのように見ていたかを知る重要な文章です。「朝日新聞」からの最初の依頼が1947年11、12月頃にパシフィック・パリセーズの彼の自宅に届きました。スイス駐在の笹本特派員が直接この作家に手紙を書いたのです。この時マンは朝日の依頼にすぐに応じました。おそらくは、日本のドイツ文学者たちがマンの作

品集の翻訳を刊行する準備をしていたという事情があったからでしょう。連絡を受けた彼はそのことを1947年12月2日の日記メモに嬉しそうに書いています。また、日本で翻訳されるのは、自分の作品が「世界文学」としての価値があるからだろうと捉えていました。この「世界文学」という指摘は、トーマス・マンが1932年発行の日本の『ゲーテ年鑑』に寄せたゲーテ論で「世界文学」という言葉

を特に論じていることを考えると、とても興味を引くものです。「ゲーテ百年祭に際して日本青年に興ふ」（掲載：日獨文化協會編輯『百年祭記念ゲーテ研究』岩波書店、1932年 1〜20頁）と題したこの文章で、1827年1月31日にゲーテを訪問したヨハン・ペーター・エッカーマンを引き合いに出しています。そこでトーマス・マンの引用によると、ゲーテはこう述べていました。「それ故私は自身他の諸國を展望するし、誰にでもさうするやうに勧めらるのだ。國民文學は今やその意義を失はんとし、「世界文學」の時代は正に來らんとしている。各人は此の時代の早く來るやうに協力せねばならない」（同上2頁）。日本の『ゲーテ年鑑』にゲーテ没後100周年記念の寄稿文を要請されたとき、「世界文学」という言葉がもつ「胸が膨ら

むような力」が彼の心を捉えました。時が経ち、1947年に日本の学者たちからトーマス・マン全集の刊行を計画しているという名誉ある申し入れを受けたとき、1932年の寄稿で用いた「人間精神の統一性という経験」が、再びマンの脳裏によみがえったのです。しかも、今回は自分の作品に關してです。

これに關連して、1949年はとても特別な年でした。というのも、マンはこの年の1月末に『ファウストゥス博士』を書き終えることができた年だったからです。この一年のあいだに、ドイツや世界の批評家から激賞され、同じく高い評価を得た論文「われわれの経験から見たニーチェの哲学」も同年3月に書き上げ、その後すぐ英語に翻訳されました。ヨーロッパやアメリカで多くの講演も行っており、この素晴らしい業績を遂げた一年を歳の暮れに思い返していました。

1947年12月4日、マンは、一回目の『日本への新年挨拶』を書き始めました。三日後、日記に「日本への文章を書き終えた」と記されています。四日間のいづれも午前

中に寄稿文に取りかかっていた。『トーマス・マン日記 1946—1948』の「補遺」は四頁にもおよび、いかに長い文であったかがうかがえます。（『トーマス・マン日記 1946—1948』紀伊國屋書店 補遺 第三十番 801—805頁）寄稿文の冒頭部で19世紀後期、いわゆる「ジャポニズム」がドイツ文化や西洋文化に及ぼした影響に言及しています。中産階級の家屋や住居に日本の装飾が欠けていることは想像がつかず、ドイツの市民が暮らす一般的な家には、エキゾチックであり、モダンな装飾の茶筒、漆器、陶器やその他の品々が置かれ、さらに裕福、且つ芸術愛好家であれば、菱川師宣や喜多川歌麿などの有名な日本の木版画も一緒に飾られてありました。19世紀以前の市民階層の家庭に生まれたものは、大概の日本の生活様式にとけ込んでいた、もちろんだからといって、日本文化についての精密で明白なイメージができていたわけではないが、とマンは論じています。

日本文化に関しては上演芸術、とりわけオペラは、西洋人の感覚にとって特別な意味がありました。イギリス人作曲家のアーサー・サリヴァンのオペレッタ「ミカド」が1

885年ロンドンで封切られた後、ヨーロッパの舞台で成功をおさめたと、マンは述べています。マンが生まれ育った町リユーベックで、まだ幼少の頃、典型的な日本像を広めたこのオペレッタに出会っていました。その後、ミュンヘンで、明治維新以降の政治と技術の近代化にもかかわらず、サムライの「ロマン主義的戦闘精神」がまだ根強く感じられる日本の舞踊家や剣士の旅興行を目にしました。

日本の進出と近代化の過程が相まって、かつてトーマス・マンを感動させた空想的な日本観を、国際政治での現実的な要素へと変化させたと彼は述べています。この「新年の挨拶」でマンはさらに、こうした現実的な日本観を育んだものとして個人的なコンタクトが増えたことをあげています。そして、第一次世界大戦後に、自分の作品を取り上げた論文を日本からはじめて受け取ったと述べています。また、短編小説の『幸福への意志』（日本語訳1925年）やそのほか短編集（日本訳1927年）、『トニーオ・クレガー』も収録された初の日本語訳がミュンヘンの自宅に送られてきたと述べています。日本語訳の全集が刊行され

ることや自分に関する研究を聞き、「感無量」と評しています。「何という不思議な体験であろう！冒険のような何というエクサイティングなことであろう！あの遠いおとぎの国で私は読まれ、知られているのだ。」(同上803頁)。戦後、数多くの新しい訳本が世に出たことで、トーマス・マン研究が大きな進歩を遂げました。これはトーマス・マンの想像を超える結果となりました。マン研究の専門家である吉田次郎、小黒康正、村田経和、下程息、エーバーハルト・シャイフェレらは各々の研究論文や著書でこのことを詳細に報告しています。

こうしたマン作品の受容と並んで、親戚が取り持つ人脈やカリフォルニアでの生活環境も関係して、さらに視野が広がってきました。さきにも登場した、義弟のクラウス・プリングスハイムは1930年代に日本で作曲講師の職に就き、1941年から1946年の間在日し、再び1951年以降には指揮者と東京芸術大学教授として日本と深い関わりを持っていました。義弟はなんどもマン家を訪れて日本の出来事について報告していました。1946年にアメリカに滞在していたときには小冊子の『日本史』を書い

ていました。また度々、義弟はマン一家にこの『日本史』を朗読していました。そのうえ、終戦前後の間、大家族の家事をとり仕切る妻カティアを助けるために日本人夫妻が雇われていました。この夫婦は異国の地ですべての財産を戦争で失っていました。マンは何度もこの二人から日本という国について、またその文化や政治について聞いていました。

1947年12月に書いた『日本への新年挨拶』の結びは、戦争と政治がテーマでした。マンはそこで、戦前の日本と第一次世界大戦前のドイツ帝国の状態を対比しています。マンは両国間には、「封建的と近代的工業化の混合、すなわち工業化されたロマン主義」と、時代はズレていたが、似たかたちであつたと捉えていました。この両国にとって、1918年や1945年は悲運でしたが、マンはワイマール共和国と比較して、日本に「過去の過ちに対する非常に明白な洞察」(同上804頁)があると見なしています。また「道徳的な革命」を期待していたようです。敗戦は、「啓蒙された新しい出発への意思を生み出す」(同上)いい機会だと考えていました。1948年1月4日の

1922年

「日本に贈る言葉」

トーマス・マン



トーマス・マン

「朝日新聞」に初めて掲載された「新年の挨拶」の締めくくりには、19世紀を支配してきた「ナシヨナリスティックな考え」は時代遅れであり、「人類全体への奉仕者として働くときのみ、どの国民にも名譽は輝く」(同上)と記し、私たちは平和政策に目を向けなければならぬと結んでいます。

トーマス・マンの「新年の挨拶」は、1922年1月1日の「朝日新聞」に掲載された。この挨拶は、マンの文学的才能と政治的見識を示す重要な文書である。彼は、ナショナリズムと独裁主義の台頭を憂い、人類全体の奉仕者としての責任を述べた。この挨拶は、マンの思想的成熟を示す重要な文書として知られている。

「朝日新聞」に初めて掲載された「新年の挨拶」の締めくくりには、19世紀を支配してきた「ナシヨナリスティックな考え」は時代遅れであり、「人類全体への奉仕者として働くときのみ、どの国民にも名譽は輝く」(同上)と記し、私たちは平和政策に目を向けなければならぬと結んでいます。

その二年後に、マンは二度目の「朝日新聞」からの日本の読者に向けた『新年のあいさつ』の依頼を受けました。この二年間は、マンにとって心

がかき乱されることの多い年月でした。1949年にマンは、1933年の亡命以来、あしかけ17年ぶりにドイツを訪れました。ゲーテ生誕200年の講演を名目に、ワイマールとフランクフルトの二都市に招かれたのです。この当時アメリカ合衆国は、反共産主義で悪名高い上院議員のジョセフ・マッカーシーの指示の下、共産主義者迫害の時代でした。そのため、マンの第二の故郷であるアメリカ合衆国では、マンに対して、今回東ドイツに向いたことに疑いの目が向けられていました。そしてFBIは膨大なトーマス・マン関連の調査文書を作成していました。マンは迫害の波と反共産主義の狂乱について、自らの原稿や講話の中で私的にも公的にも苦言を呈していました。

なによりも朝鮮戦争勃発のような政治の上での劇的な変化もありましたが、トーマス・マンは自分に立ち戻っていろいろな執筆活動が続けることができました。1950年10月26日に脱稿できた中編小説『選ばれし人』、この作品に取り組んだ1948年から1950年の間は特に充実していました。しかし忘れてはいけませんが、マンにとって最も身近な人の死が続けて起こった時期でもあったことで

す。1949年5月に長男クラウスが自らの命を断ち、1950年3月に兄ハイリッヒの訃報の知らせを受けています（1949年4月21日に、末弟ヴィクトルの死去の知らせは、それに比べるとあまり衝撃ではありませんでした。もともと彼はこの末弟については低い評価の発言をなすことも重ねていたからです）。しかし他方で、1950年夏の日記には全く別の記録が際立っています。この時すでに75歳を迎えていた作家はホテルの給仕であったドイツ人青年フランツェル・ヴェスターマイアーに情熱的な恋愛感情を抱き始めます。チューリッヒのグランドホテル「ドルダー」での日々を記した日記には、この晩年の愛の幸福感が素直に記述されています。もともと結局プラトニックなままで、相手が応じてくれることはなかったのですが。

1949—50年には、ますますトーマス・マンと日本との交流が濃密になりました。パシフィック・パリセーズの自宅にしばしば日本からの来客があり、日本の学者とも頻繁な手紙のやり取りがありました。手紙での話題は、作品の解釈だけにとどまらず、敗戦後の日本とドイツの若者のための精神的・道徳的なオリエンテーションについて

も、たびたび取り上げていました。日本から新刊の訳本がこの作家の手元に届く度に、この上なく喜び、気を良くした様が記されていました。例えば、1949年2月に加藤子明が関わった短編小説『十戒』を受け取った時がそうでした。また、義弟プリングスハイムの活躍にも注目していました。1950年11月、マンが日本に送った書簡があります。誰に宛てた手紙か今のところ分かっていませんが、その内容は、プリングスハイムが執筆した「日本の歴史」に関する本に対して日本を弁護しすぎると感じながらも、この音楽家に賛美の言葉を述べ、彼が日本音楽の発展に貢献してきたことを称えるために、東京で記念演奏会が開かれることに感謝を書き記していました。

1950年12月18日に寄稿した「朝日新聞」の『新年のあいさつ』が、翌年1月4日の朝刊に掲載されました。前回の寄稿から二年が経過し、そのあいだの異文化間の出来事について記述しています。（『トーマス・マン日記 1949—1950』紀伊國屋書店 補遺 第三十番 633（636頁）日本との「知的交流」とこの交流が「より活性化」していることが、トーマス・マンに再び三頁にもお

来を見通したきわめて反時代的な考察です。これを現代的な言葉で言えば「グローバル・ヴィジョン」と言い表すことが出来るでしょう。さらに続く挨拶文は、社会問題（飢餓と不平等）の克服と多宗教の共存、いわば新しい「世界宗教」という発想に由来する「宗教的人道主義」に触れています。1950年から51年へと新しい年を迎えるときに、日本の読者に宛てた挨拶の言葉ほどに、より明確にトーマス・マンの人道の普遍主義が読み取れるものはめったにありません。

日本のトーマス・マン読者は、たった一年待ただけで次の三度目の『日本への新年のメッセージ』を受けることになりました。しかし、1951年12月4日、「共同通信社」に送られた原稿の内容に期待を裏切られます（『トーマス・マン日記 1951—1952』紀伊國屋書店 諸記録 第四十二番 706頁）。同年9月8日のサンフランシスコ平和条約の調印が行われ、この出来事は当然のことながら大変重要でありました。しかし前年同様に、このドイツ人作家は日本の平和への覚悟と資質をたった数行で誉め称えていただけでした。マン宛に届く数多くの書状か

ら、日本が戦争の不幸から学んだという印象をマンに想起させ、それゆえに日本の読者に「平和の大義を押し進め、それに忍耐強く奉仕する」（同上）ことを呼びかけていました。こうした曖昧な普遍性を志向する平和主義以上のことは、この「新年の挨拶」にはありません。それには理由がありました。それについて触れておきましょう。

1951年のこの時期、マンは深い疑念に押しつぶされていた。それは、自身の作品、長期間の中断後に再開した長編小説『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』がうまく進まないことについての不満からでした。自身の情緒不安定から「創作への自信喪失」に陥り、1951年の日記にはそのことがたくさんでています。7月7日に「期待への無力」と記し、12月12日に「憂愁、陰鬱な日々」（同上314頁）とありました。『クルル』の進行が思わしくないことへの不満と並んで、アメリカ合衆国における政治情勢の先鋭化のゆえに個人的状況を案じ始めていました。上院議員マッカーシーがとりしきる「非米活動委員会」の動向について常に記されていました。アメリカ合衆国の朝鮮戦争遂行について何度も拒絶を表明していたため、マン

はアメリカ治安機関の監視下におかれていました。一方で、アメリカ合衆国やヨーロッパの左派はトーマス・マンという人物とその名前を政治的・悪用してはいたため、マンは不快感を抱いていました。3月20日、マンは「私は共産主義者ではない」と、ドイツ文学者の森川俊夫に宛てた貴重な手紙に記していました。また次のようにも論じています。「おびただしい墮落、腐敗の兆候によって次第に「秩序」の名にふさわしくないものになり、事実、しばしば観察者に歴史的に処断されてしまったのではないかという印象を与える社会秩序、経済秩序に対して、共産主義は革命的に反対の立場を取るからです」（日本のある青年に」、掲載：『トーマス・マン全集Ⅺ』新潮社 1972年 667〜668頁）。このようにトーマス・マンは二つの矛盾した状態に巻き込まれていたのです。マンは平和、自由や社会の進歩に貢献することを望みますが、その反面で、共産主義者に利用されることを嫌い、これが基で「非米活動委員会」のマッカーシーから疑念を持たれる結果となったのです。この時期のマンは、アメリカを離れ、ドイツ国内でないとしてもヨーロッパへ帰ることを考えなければならぬ困難な状況でした。

個人的にも政治的にも厳しい状況に直面しているさなか、トーマス・マンは「新年の挨拶」に関する日本からの依頼を、少し難しいと思ったようですが、東京で活動する義弟を喜ばそうと洪々の依頼に応じました。しかし12月2日、明らかに面倒と感じ、マンは長女のエーリカにこの「新年のあいさつ」の代稿を委ねました。彼女は重要な政治問題の助言をするなどマンにとって不可欠な助手となっていました。マンが政治的な発言で危ういことにならないよう配慮していたのは、彼女でした。エーリカはそれらしい原稿を一日足らずで素早く仕上げ、父親に渡ししました。娘が書いた下書きに手直しを加え、四日に東京へ寄稿文を送ったのでした。

この二年後の1953年12月10日に、四度目で最後となる日本の読者に向けた『新年のあいさつ』を寄稿しました。「産業経済新聞」へのこの寄稿は翌年1月6日と7日に、マンの写真と共に「日本を想う」と題して二日連続で掲載されました（『トーマス・マン日記 1953—1955』紀伊國屋書店 諸記録 第十九番 735〜738頁）。マンにとって再び切実な変化が絡んだ晩年の二年で

起などが起こります。マンは繰り返し返し東ドイツに対する西ドイツの政治姿勢を批判する姿勢で世間に発言することがありました。こうしたことから思わぬ誤解をまねき、マンは共産主義者に近い立ち位置にいと批判を受けていました。このため、父親に揺るぎない忠誠心をもつ長女のエーリカは、著名な父親の政治的発言があまり先鋭な表現をとらないように棘を抜くことに努めていました。

1953年、日本との関係を継続させていたのは義弟クラウス・プリングスハイムと末の息子ミヒアエルでした。プリングスハイムは指揮者と音楽大学の教授を続けていました。三男のミヒアエルはアメリカでヴィオラ奏者として挫折していましたが、音楽家として成功を掴もうと日本での演奏会開催に力を注ぎました。このような背景で、1954年の「新年の挨拶」を読み進めなければなりません。まず、日本への感謝の言葉で始まり、これまで日本を訪問することが叶っていないことを惜しむ気持ちを明記しています。寄稿文中で「大きな作品」に集中しなければならず、何度も計画を延期せざるを得なかったと述べています。この作品とは長編小説『クルル』を指しています。日

本を訪れることの出来ないマンに代わり、ミヒアエルが演奏会を開くため日本に滞在していることを紹介し、まるでこの息子の宣伝をしているかのような印象を与えています。このように、ミヒアエルは色々と人生設計に失敗し、その上、身の丈に合っていない贅沢な生活を好んでいたことなどが、両親の頭から離れず案じさせていたのです。

さらに続く文は、西洋音楽への日本人の感受力を誉め称え、日本の読者に媚びたような原稿でした。身近に音楽があることを述べている箇所は、彼の作品と人物の自己分析で、興味が湧きます。マン自身が音楽家になれなかったことを悔いています。『『トーマス・マン日記 1953—1955』737頁』で人生を送っていると記述しています。そして、マンはこうも記述しています。「—音楽の効果をあげる手段—つまりはライトモチーフを文学に転用することを、魅力あふれる実験と感じてきました」というのです。これを踏まえて、—音楽芸術に拓けた文筆家として—彼は自問します。日本人が西洋音楽を積極的に受け入れるようになったことと、音楽性がある自分の作品が好意的に日本人に受容されるこ

とと関係があるのだろうか、と。挨拶の文末では、自らの著書の日本語版に触れて、それを誇らしく思っていること、またその一部を、マン70歳の誕生日にイェール大学図書館で開催した展示会に提供していたことが書かれてあります。まだ見ぬ異国の地で、彼の長編小説、短編小説や隨筆が読まれ、評価されているのは深い感動をもたらした、と述べています。一方で自分はドイツおよびヨーロッパとの精神的なつながりを感じるが、もう一方では、日本でのマン作品の受容は、コスモポリタンとしての自分を満足させてくれると、締めくくっています。

こうして見ると、末の息子の今後の運命や日本での成功を案じていたこともわずかにありますが、むしろ、トーマス・マン作品の影響力がそうさせたのです。日本からの多くの訪問者や、ほぼすべての著作の日本語版刊行や日本のマン研究があったからこそ、敗戦後の日本の読者に宛てて何度も「新年の挨拶」を書くことになったのです。こうした発言を―結論的に言えば―彼は、戦争と亡命に関するドイツでの論争に結びつけて考えていました。日本の平和政策を彼は、素晴らしい例となるとして幾度となく賞賛して

います。この意味でトーマス・マンは日本向けの「新年の挨拶」においても、信念のヒューマニストおよび平和主義者としての自分を表していたのです。

* * *

この隨筆の題名である“遠いおとぎの国”(独語: *Das balfeme*)は、現在、ドイツでほとんど使用されなくなった言葉です。しかし、初期近代の紀行文で稀に見かけます。この語彙は、おとぎ話に出てくるような世界を指します。日本とは、トーマス・マンにとって目で見て経験したり、訪れたりしたことのない神秘に満ちた世界であったため、このようにマンは表現しました。

この度、ここに掲載しました隨筆は學術論文の形式ではありません。そのため、詳細な脚注は省きます。また、四件の「新年のあいさつ」と日記の記述は文中に(括弧)で参照してあります。また、次のトーマス・マン研究文献から二つの書籍を参考にしました。

.. Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. / Zusam-

mengestellt von Hans Bürgin und Hans — Otto Mayer. S.
Fischer Verlag 1965
: Hermann Kurzke, Thomas Mann. Epoche — Werk — Wirkung.
2. Aufl. C. H. Beck 1991.)

終わりに

このテキストを執筆するにあたり、朝日新聞、共同通信社にトーマス・マン直筆の書簡資料について問い合わせをしました。残念ながら、戦後間もないという時代背景に原因があるのでしようが、資料は保管されていませんでした。私の突然の問い合わせに快く応じて下さった朝日新聞・社史編修センター長の前田浩次様、共同通信者・ニュースセンター副センター長の田村孝様に深く感謝致します。

また、この場をお借りしてドイツ語原稿と日本語原稿をご監修いただいた三島憲一先生に感謝の言葉を申し上げます。貴重なご指摘やご意見を下さり、原稿の仕上がりまで根気強くお付き合いました。そして訳者の池田昌子さんにも心からお礼を申し上げます。